

神経化学若手研究者育成セミナーを通して

鳥取大学 大学院 医学系研究科 機能再生医科学専攻
生体高次機能学部門 畠研究室 博士後期課程 2年

國石 洋

第 58 回日本神経化学会大会（2015 年 9 月 11 日～13 日、大宮）に併せて開催されました、若手研究者育成セミナーに参加させていただきました。このセミナーは 2008 年の初開催から数えて 8 回目になります。私は 2013 年の京都のセミナーから 3 回連続で参加させていただいており、毎年有意義な体験をさせていただいております。本稿では、今回のセミナーを通じて得た経験を皆様にお伝えしたいと思います。

本セミナーでは、5 つのグループに分かれ、それぞれ別々の先生方に講義を行っていただきました。講義のテーマはグループごとに様々で、最先端の研究手法・知見から、留学など研究者としてのキャリアパスについてなど、先生方自身の経験を交えつつ、講義やフリーディスカッションを行いました。私は生理学研究所の鹿川哲史先生と前橋工科大学の石川保幸先生が講師を担当された D グループに参加しました。

鹿川先生の講義は、「神経化学研究者の未来展望」というタイトルで、これまでのご自身の研究キャリアについて説明されながら、リサーチアドミニストレイター（URA : University Research Administrator）という職種についてご紹介いただきました。リサーチアドミニストレイターとは簡単にいえば研究者と行政の橋渡しをする仕事です。具体的には、研究費の申請の支援から研究の進捗状況の管理・報告など、研究プロジェクトのマネジメント支援を行い、博士号取得者の新たな活躍が期待される職業です。鹿川先生ご自身、この 4 月からこのような科学行政の道に進まれておられ、研究者に携わる職業としての新たな可能性を知ることができ、今後の進路の参考になりました。

石川先生は「神経研究者として様々な学部を渡り歩いて」という講義タイトルで、ご自身の研究キャリアについてお話ししていただきました。石川先生はもともと農学部のご出身で、そこでの経験から修士・博士課程では培養系でアポトーシスの研究を行われ、現在は電気生理学と行動実験を行っておられます。アポトーシスの研究経験から、何が細胞にとって悪い条件かわかっていることが、脳スライスを用いた長時間の電気生理実験に活着していると聞いて、たとえ研究テーマが変わっても自分が身に付けた知識・手技は必ず生きてくるのだなと感銘を受けました。また、様々なテーマで研究されていく中でも「ブリンカーをつける（一つの目の前のことに集中してやってみる）」ことが重要だというお話しが印象深く心に残っています。

このように、両先生からご自身のキャリア経験を交えながら、研究者以外の道、或いは

研究者として研究を続けていくうえでの様々な可能性や、道を示していただき、とても有意義なグループディスカッションであったと感じています。

また本セミナーの特徴の一つは先生方と非常に近い距離で交流できることです。講義後に行われるフリーディスカッションの際には自分のグループの講師・チューターの先生方はもちろん、他のグループの先生方とも、グループの垣根を越えてお話しできます。私自身も、様々な先生に研究生活、また研究以外の日常のことについてもお話しいただいたり、逆にこちらの様々な相談にも乗っていただいたりしました。学会場では多忙な先生方とも気兼ねなくお話しできる貴重な機会でした。加えて、このフリーディスカッションでは他大学で研究を行っている学生の方々と交流できます。研究についての意見を聞いたり、実験手技についての悩みの共有・アドバイスはもちろん、はたまたプライベートの話で盛り上がりたりしました。翌日、知り合った友人の学会発表を聴いたり、逆に私の発表を聴きに来てもらって、考えさせられるような意見をもらうことができました。また、以前のセミナーで知り合った学生の方々が、素晴らしい学会発表を行っていて、自分も研究により一層は励もうと奮起しました。

一言に神経化学会といっても、その中には様々なバックグラウンドで研究をしておられる先生、学生の方々がおられます。このセミナーは、普段の研究生活において、つい狭くなりがちな視点を広げる良いチャンスだと思います。ここで得た繋がりは今後、研究生活を続けていく上で大切にしていきたいと思います。このように本セミナーは価値のある経験ができる機会だと思いますので、少しでも興味をもたれた方は、ぜひ一度参加していただけると幸いです。

最後になりましたが、若手研究者育成セミナーの開催・運営に携わった関係者の方々、セミナーで得た経験をこうしてレポートで発表する機会を設けて下さいました日本神経化学会の皆様に心より感謝申し上げます。研究者としてスタートラインに立って間もない私ですが、このセミナーで得た経験、繋がりを活かし、日本の神経化学の発展に貢献できるような人材になっていきたいと考えております。